教育のしろ

第162号
令和3年2月24日
能代市教育委員会
学校教育課
創刊
昭和42年10月10日
題字 元能代市教育長
鎌田　宏

巻頭言

知行合一

能代第一中学校長
金野　尚人

本校校長室には、『知行合一』と書かれた巨大な扁額があります。これは、昭和50年夏に当時の平川準一校長の求めに応じて元能代市長の柳谷清三郎氏が揮毫したものです。

『知行合一』は、「認識と行動の一致」「認識と行動（体験）は一体不可分」「真の認識は実践を通して獲得される」などと説明され、実践的な知の重要性を捉えたものであり、「生きる力」につながるものとして今日的な意味をもっています。

子どもたちが生きる21世紀の社会は、知識が高度化・複合化・流動化する「知識基盤社会化」やグローバル化が一層進展する社会です。それに対応できるよう、学習指導要領のキーワードの一つが「主体的・対話的で深い学び」とされ、生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に必要な資質・能力の育成を求めています。まさに「知行合一」につながるものです。

『知行合一』と対面して2年。「習得した知識や技能を活用し、豊かに考え、問題を解決したり、他者と新しい考えを創造したりする学びに迫ることができたか？」と常に問われてきた気がします。授業改善、行事のねらいと生徒の生かし方の修正、総合的な学習の時間の方向性と内容の修正を総合的に行い、それに迫ろうとしてきましたが、まだまだ反省すべき点が多いと感じている年度末です。

スクールニュース

学級対抗「黒板アートコンクール」

第四小学校
教頭　鈴木　伸彦

本校の児童会活動では、毎年各委員会が主体となって様々な活動に取り組んでいる。今年は、コロナ禍のため、年度当初予定していた活動が縮小あるいは中止という状況に追い込まれた。このような状況の中で、運営委員会が何とか全校を盛り上げようと企画したものが、「黒板アートコンクール」である。

三年生以上の学級ごとの活動として、一・二年生はできあがった作品を鑑賞することにした。十二月のある一週間を作品制作期間とした。完成したものを写真に取り込み全校に掲示した。

運営委員会が審査をし、各学級の作品に、○○賞をあげることとした。どの学級も力作ぞろいで学級のカラーが出ていた。初めての試みだが、学級内でアイディアを出し合い、全員が脚色に参加し、一つの作品を完成させることを通して、思いやりや協力することの大切さを高めた時間になったに違いない。

輝きの場面

二ツ井中学校区 起業体験プロジェクト

「いとく」で「馬い丼」を販売
二ツ井中学校

これが私の指導法
～知的財産の継承～

第五小学校
大髙　玲子

学級担任として二十年近く欠かさず続けていることがある。自学ノートに「授業日記」を書かせることだ。以前同学年を組んだ先生の実践から学び、自分なりにアレンジして続けてきた。その日の授業を一つ選び、気付きや考え、思いや疑問を書くのが約束。慣れるまで少々時間は要するが、本気の返事を書いているうちに、子どもも本気になる。たくさんの宝がかくされているから続けてきた。

道徳の授業のことを書いた男子。「今日の授業の発言は本音じゃない。ぼくは、今日の授業ではうまく語れなかった」と。教材研究があまかったことや、発問の構成が不十分だったことを反省する。音楽の授業を書いた女子。「今日の先生は焦っていた。少しずつ変化している私たちを信じてほしい」と。学習発表会が迫っていたあの日、自分の想いばかり先行していた。主体的に取り組もうとし始めていた子どもの変化に気付けなかった自分を深く反省。

学級経営が軌道に乗り、授業中の子どもたちに変化が見られると、子どもたちの書く内容は濃くなり、分量も増す。スタートするときは、五～六行。徐々に、一ページ書く子どもも出てくる。国語の授業をした時、ある男子と筆者の考え方について議論した。日記でのやりとりは、一週間続いた。書かせられる日記から、書きたくてたまらない日記になることが理想。そのためには、教材研究と魅力ある授業づくり、そして、子どもとの信頼関係づくりと学級経営。さらには、やり通す覚悟。

今年は六年生を担任している。卒業式前日、最後の授業日記に子どもたちがどんなことを書くのか。楽しみでもあり、緊張もする。

我が校の実践

淳城南小学校
金子　秀成

主体的に学び合い、確かな学力を身に付ける子どもの育成

「主体的に学び合い、確かな学力を身に付ける子どもの育成」を目指して、本校では、重点教科を決めず、どの教科からでも研究主題に迫れるように授業検証を重ねています。今年度は、国語、算数、道徳、体育、外国語、特別支援、通級指導と様々な教科等で研修を積み重ねることができました。

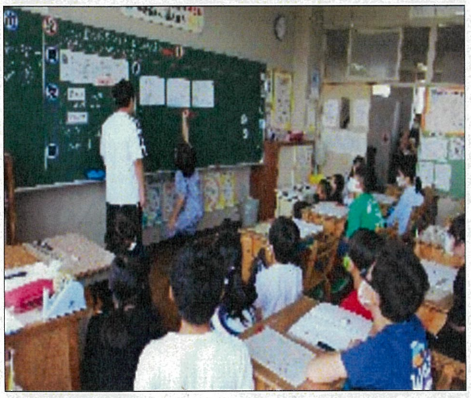
南小が目指す授業像は、次の六つです。①達成感や意欲の高まる『しかけ』のある授業。②ゴールを明確にし、一人一人の定着を見届ける授業。③発問を吟味して、学び合いが深まる授業。④お互いの考えのよさを認め合う、温かい雰囲気を大切にする授業。⑤一人一人を励まし、自信につながる机間指導を行う授業。⑥子どもの発言を生かした、構造的な板書を意識した授業。

これらのことを日々の実践に取り入れ、授業力の向上を図ることで、子どもたちの学力向上につながっていると感じています。

また、授業づくりでは次のようなポイントを段階ごとに設定しています。

導入では、「わくわく感、必要感のある課題の設定」「子どもと教師でつくりあげる課題」です。展開では、「友達と関わって話合いをつなげる」「よりよい考えへと高まる一体感」「友達のよさを認め合う」です。終末では、「自分の成長を実感できる振り返り」「次時への意欲が高まるしかけ」です。

今年度も残りわずかとなりましたが、二月に校内研修会を二回開催し、県学習状況調査結果及び北管内学力向上推進協議会の情報共有や研修アンケートのまとめなどを行い、今年度の研修の成果を来年度へと確実につなげるようにしていきたいと思います。



編集後記

今年度最終号の発行にこぎつけました。バックナンバーを読んでいると、諸先輩の金言や実践の数々が深く印象に残りました。今後の世代交代を見据え、これまでは日常の業務の中で継承されてきた様々なことが、これからは意識しないと継承することができないのではないかと考えさせられました。

教育における「不易と流行」という言葉を聞くことがあります。「教育のしろ」の中には、諸先輩が培い、受け継いできたたくさんの『不易』を感じ取ることができます。時代や社会の変化に対応しつつ、本質となるべき部分をしっかりと見極め、それらの『不易』の部分を受け継いでいかなければいけないと感じました。

学校生活の中でも制約を強いられる中、玉稿をお寄せいただき、ありがとうございました。（F）